

## 「シンガポール国立大学分析アジア哲学プログラム参加報告書」

京都大学文学研究科修士課程2年 田中凌

## ● 学習成果およびプログラム内容

本プログラムによるシンガポール滞在中の主な活動内容は、以下の二つである：i) Second Annual NUS-National Chenching University-Kyoto University Triangular Graduate Conference on Asian Philosophy への参加、および ii) シンガポール国立大学 (NUS)、Yale-NUS College で開講された心の哲学セミナーシリーズへの参加。

i) Second Annual NUS-National Chenching University-Kyoto University Triangular Graduate Conference on Asian Philosophy は、3月6日から3月8日まで NUS の哲学科で開催された。このカンファレンスの趣旨は、三大学から参加する学生がアジア圏の哲学にかんする自身の研究を発表し、議論を行うというもので、3日間で計13人の学生が発表し、また4人のキーノートスピーチが設けられた。内容はインド、中国の仏教哲学、易経、日本哲学、西洋思想と東洋思想の比較研究等種類に富んだものだった。

派遣者は、30分の発表枠で“Two Images of the World—Sellars and Buddhism—”と題した比較研究の発表を行った。本発表では、20世紀アメリカの哲学者 Wilfrid Sellars の「世界についての二つのイメージ」というテーマと、仏教哲学に見られる「二つの真理説 (二諦説)」というテーマに見られる類似性を哲学的に検討し、現代哲学の枠組みにおいて有効であると思われる洞察を引き出した。具体的には、仏教哲学における「世俗諦 (*saṃvṛtisatya*)」と「勝義諦 (*paramārthasatya*)」という概念と、セラーズの哲学的枠組みにおける「日常的イメージ (manifest image)」と「科学的イメージ (scientific image)」という概念との間に見られる、「後者が世界のほんとうの姿を現す一方で、前者は人間社会における合意形成等によって形成されたものにすぎない」という共通のテーマを比較した。アビダルマ思想では一種の形而上学的な実在論が前提され、前者は後者へ還元されるべきものとして理解されているのに対し、中観派ではそのような形而上学的実在論は批判され、ある意味で後者が前者によって構成されるものとして考えられていることを論じ、この考えの移行とパラレルな形で、セラーズの「二つのイメージ」に対して二種類の解釈を与えられることを明らかにした。

ii) 以上のカンファレンスと並行して、NUS および Yale-NUS College の教員による心の哲学をテーマとしたセミナーシリーズが開講された。このセミナーシリーズは日本および台湾からの学生向けに設定されたもので、一回あたり2時間のセミナーが計6回行われた。セミナーでは派遣者が専門的に研究している Wilfrid Sellars をはじめ、David Lewis、Daniel Dennett、David Chalmers、Frank Jackson 等による、現代の心の哲学において大きな影響を持った基本文献について深く理解し、批判的に検討した。特に派遣者は心の哲学に強い興味を持っており、博士課程以降においてこの分野で専門的に研究することを計画しているため、今後の研究にとって非常に有意義な体験となった。

## ● 海外での経験

派遣者は、以前にも本プログラムを利用して二回、シンガポール国立大学に研究滞在していた (2013年11月から2014年3月、および同8月から10月)。現地の学生や研究者との関係性もある程度確立していたため、カンファレンスやセミナー等の機会でもスムーズにコミュニケーションをとり、自身の研究の改善に役立てることができた。また今回のカンファレンスにはシンガポールだけでなく台湾からの学生も参加したため、彼らとも新しいコネクションを作ることができた。

英語による口頭での議論をスムーズに行うということは、以前の滞在も含め常に課題となっているが、今回の滞在でのカンファレンスおよびセミナー参加を通じて、この点にかんしてやや上達を感じることができた。また、公式な場での英語発表は初めての経験であったので、今後改善すべき点の発見を含め、得るところの多い体験となった。

## ● 進路への影響

派遣者は哲学分野での研究職を進路として望んでおり、また具体的には来年以降英語圏の大学での博士課程取得のための留学を考えている。今回の派遣においては、英語での発表や議論を経験することができ、英語圏への留学のために必要な能力の再確認とその向上へとつながった。また、普段の自分の専門分野ではないアジア圏の哲学について深く研究することで、学問的視野の拡大や、今後の研究への示唆が得られた。